

研究ノート

ベネッセアートサイト直島における「直島らしさ」の形成をめぐって

高見澤 なごみ*・古田 賢**・枝木 妙子***・
永井 彩子****・後山 剛毅*****

はじめに

近年、地域活性化を目的とした現代アートプロジェクトが多く実践されている。そのなかでも特筆すべきものとしてベネッセアートサイト直島(以下、アートサイト直島)があげられる。アートサイト直島は株式会社ベネッセホールディングス(以下、ベネッセ)と公益財団法人福武財団によって、瀬戸内海にある島々のひとつ直島(香川県)を中心に展開されるアートプロジェクトである。1989年にキャンプ場として始まったこの取り組みは、90年代に入るとミュージアムを開館、さらには島の廃屋を作品展示室として再利用する「家プロジェクト」を展開した。

院生プロジェクト「博物館資料研究会」のメンバーである筆者たちは、直島が美術愛好家を含む多くの観光客を呼び寄せていることに興味をもった。その理由を知るべく文献調査を行ったうえで2015年7月に直島に赴き、施設の見学や町民への聞き取り調査を行った。

議論を進めるうちアートサイト直島の重要な特徴として、アートプロジェクトを通して何らかの「直島の固有性」が形成され、島の内外に発信されていることが挙げられるのではないかと考えるようになった。さらに、プロジェクトを主導しているベネッセの固有性もまた形成され発信されているのではないかと仮定するに至った。

例えば、ベネッセが発行している『直島通信』の創刊号で秋元雄史が家プロジェクトに関して以下のように述べている。「近年では過疎と高齢化が進み、町中には空き家が目立ち始めている。(中略) こういった実社会からのニーズを受け、島のアイデンティティの問題や固有の文化の問題を考えていくといった側面が必要になってくる」¹。

この発言からは直島のプロジェクトの目的は、住民に直島の固有性を認識してもらうことであると読み取れる。さらにアートサイト直島の代表者である福武總一郎も、彼らが深く関わっている瀬戸内国際芸術祭について「近代化や都市化によって失われた地域の個性や文化を芸術祭を通じて取り戻したい」²と述べている。ベネッセの意味は「よく生きる」であり、企業理念にもなっている。これらの発言からは、よく生きるために土地の固有性や文化は必要なものであること、そしてそれらを形成するためには、彼らの主要事業である教育だけではなく、アートの活用が有効であると考えていることは明白である。

直島の地域表象の先行研究として、宮本結佳の論文があげられる³。この論文において注目したのは以下の2点である。1点目は、住民はベネッセを媒介としながらも、来訪者を意識した町の観光資源を自分達でコントロールできることを自覚したこと。そして2点目は、往時の生活風景を再現する作品のなかで、ベネッセが想定していなかった形で、住民たちが来訪者に思い出を語るなどして、新しい地域表象を創出したことである。

宮本論文を踏まえて以下のことが仮定できる。住民はベネッセとは異なる視点や方法で地域表象の形成に貢献し

キーワード：地域活性、アート・ツーリズム、瀬戸内芸術祭、メセナ、福武哲彦

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2014年度入学 表象領域

**立命館大学大学院先端総合学術研究科 2014年度3年次転入学 表象領域

***立命館大学大学院先端総合学術研究科 2013年度入学 表象領域

****立命館大学大学院文学研究科文化情報学専修

*****立命館大学大学院先端総合学術研究科 2015年度入学 表象領域

ており、直島の固有性はベネッセが発信するものと、住民が発信するものの差異が想定され、表象の仕方も内容も発信者によって大きく異なるのではないだろうか。

宮本以外にも多くの先行研究がベネッセと住民との関係性に主眼を置いてきたが、本稿の目的は直島の地域表象の多様性を明らかにすることである。具体的にはベネッセ主導のもの、ベネッセと住民の協力によるもの、住民主導によるものの3つの側面を意識しながら地域表象を検討したい。そのための鍵となるのは、アートプロジェクトのなかで表象された「直島らしさ」と同時に「ベネッセらしさ」である。以下、海外の観光ガイドでの記述、直島の歴史、ベネッセの美術事業の歴史、直島で展開される家プロジェクトという4つの視点から考察を行うことで、「直島らしさ」と「ベネッセらしさ」の特徴を浮かび上がらせたい。

1. 海外の観光ガイドにおけるアートサイト直島

直島には日本国内外から年間約40万人(2011年)が来訪しており、観光地として注目されている⁴。来訪者の多くはアートに興味を持って直島を訪問するが、実際に訪れることで島そのものの魅力を認識しているとされている⁵。アートサイト直島は『コンデナスト・トラベラー』(Condé Nast社)などの海外の旅行誌や旅行サイトでも数多く紹介されてきた⁶。そこで本節では、直島に対する海外の観光ガイドでの記述における「直島らしさ」の特徴を検討したい。

まず、海外の観光ガイドにおいて触れられるのは建築物と収蔵作品の質の高さである⁷。さらに作品を展示する建築物は安藤忠雄⁸をはじめとする海外での活動歴や受賞歴が多くある著名な建築家が手掛けており、建築物自体が作品として扱われている。1992年に初めて開館したベネッセハウスミュージアムは、美術館でありかつホテルとして宿泊できる(図1)。

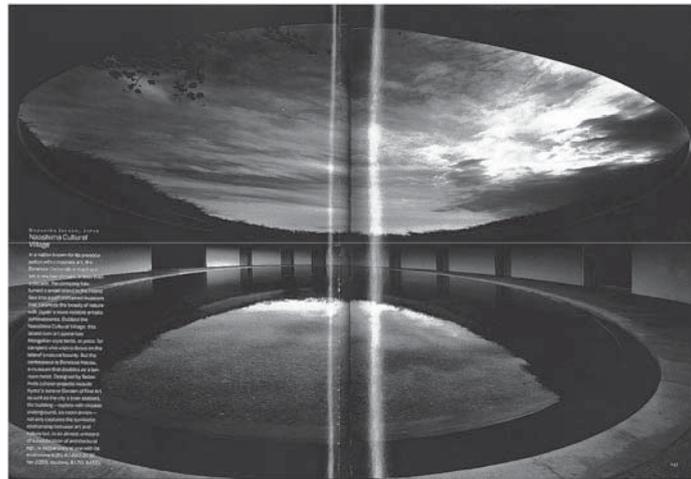


図1 『コンデナスト・トラベラー』(Condé Nast社)で紹介されているベネッセハウス
“Seven Wonders” *Condé Nast Traveler*, 35(3), pp.142-143より

また、地中美術館は、その名の通り地下にありながらも館内は開放的な空間が演出されているとして注目されている⁹。収蔵作品もヴェネチア・ビエンナーレやドクメンタ等の国際展で活躍しているアーティストの作品を中心に構成されており、世界的に知名度のあるアーティストの作品が多い。

ここからベネッセはアートの分野において海外に目を向けていることは明らかである。ベネッセ賞の存在に注目したい。ベネッセ賞は世界で最も歴史がある国際美術展ヴェネチア・ビエンナーレ出品作品を対象に「既成概念の枠組みを超える若手の表現」¹⁰を評価・支援する事を目的として1995年に開始された。受賞者は賞金が授与されるだけでなく、直島での作品制作を依頼される。これまで9名が直島で作品制作の活動を行い、4名が作品発表を行った。ベネッセ賞の特徴は、作品の選定を外部のキュレーターが行っていることであり、国際的に活躍するキュレーター

たちの評価を取り入れてきた。最先端かつ世界的に名の知られているアーティストの作品を収集するという方針が海外へのセールスポイントにもなっている。

さらに直島が目される重要な要因として、直島という立地の特異性と、コミッションワーク¹¹によって実現した独特の展示方法が考えられる。海外の観光ガイドの多くは、直島と都会の美術館を対比させている¹²。そこで強調されていることは、著名な現代美術館の多くが都会の喧騒のなかにあるのに対し、直島はアクセスに時間はかかるが、静かで自然があふれた場所であるという点である。海外の観光ガイドでは直島に行くにはローカル線を乗り継いでさらにフェリーに乗る必要がある事が強調され、自然のなかでアートを鑑賞できることも紹介されている¹³。

このように海外の観光ガイドでは、ベネッセは世界的に知名度の高いアートを、通常の美術館とは異なる環境のなかで鑑賞する事が出来る、自然豊かなリゾートとして描かれている。この最先端のアートリゾートという定義はベネッセのアートプロジェクトによってつくられた「直島らしさ」であるといえるだろう。

本節では、現在アートサイト直島が海外でどうみられているかを概観した。次節では直島の歴史をかえりみて、そこに「直島らしさ」を見出すことが可能かどうか検証していく。

2. 直島の歴史のリズム

瀬戸内のもつ自然と歴史のリズムと、それに共振するセレクトされたアートがともに響きあう創造の場となり、また日本のみならず世界に向けて強烈なメッセージを発信する場所として静かにその存在を示そうとしています¹⁴。

アートサイト直島の公式サイトにある總一郎の言葉である。この文章に見られる「瀬戸内のもつ自然と歴史のリズム」とは何を指すのだろうか。また、その「リズム」のなかで直島はいかなる律動を鳴らすのだろうか。

先述の宮本の議論によると、それはベネッセ介入以降の直島における住民と観光の関係を指摘しているに留まっている¹⁵。アートサイト直島において強調される「土地性」とは何なのか。本節は、アートサイト直島の掲げる「瀬戸内のもつ自然と歴史のリズム」について、ベネッセ介入以前からの直島の歴史を概観することで、その律動の断片を再現することとする。

直島の由来は中世初期にまでさかのぼる。直島は現在、港から程近い岡山県宇野沖に位置する小島でありながら、香川県に属している。1890年以降——香川県香川郡直島村が成立して以降も、しばらくは変わることなく漁業が人々の生業の中心であった。

『直島町史』によると、就業者別人口表から、島の経済の中心が漁業や農業といった近世以前の第一次産業から、製錬所の開業を経て、第二次産業である製鉄業を核としたものへと移行していった（図2）。第一次世界大戦によっ

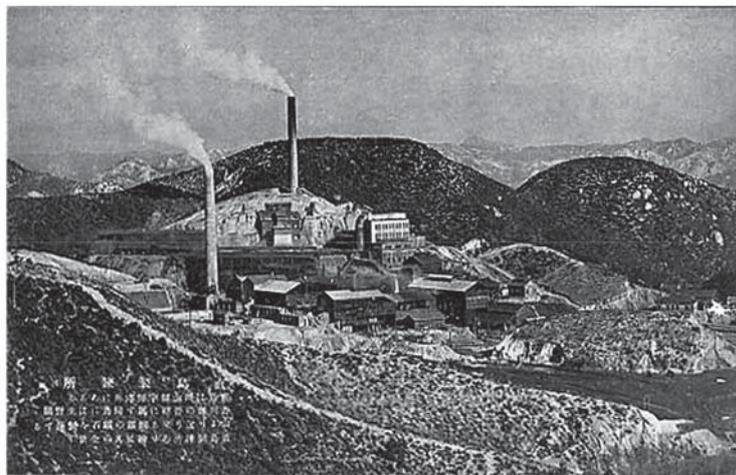


図2 昭和初期の絵葉書「直島製錬所」（1929年撮影と推定される）、個人蔵

て好景気もたらされたが、その影響は直島では長期間にわたって継続することはなく、昭和前期には製錬所は不況のなかで操業を続けていくことになる。

その状況で、戦後直島へと受け継がれる観光化事業が産声をあげた。1934年、瀬戸内海国立公園に直島の多くの場所以指定され、琴弾地が海水浴場として宣伝されるようになった。このことは、自然景観とリゾート化を中心とした直島の観光地化が、早くも戦前から着手されていたことを示している。次に戦後に目を移そう。1951年、四国新聞社が企画した「讃岐百景」の一つに琴弾地が選定されたことをきっかけとして、瀬戸内海国立公園指定以来とだえていた観光立村への意欲が再燃した。1953年の町制への移行以来、1955年までの間に観光基盤が広がっていった。その後、昭和30年代（1955～1964年）中頃には、民間で観光事業に注目し宿泊施設を開業するものもあったが、振るわなかった。1958年に当選した三宅親連町長は、1959年度当初予算の大綱説明のなかで、重点政策のひとつに「自主的産業振興対策と観光事業の基礎確立」を掲げた¹⁶。こうした経緯を踏まえ、直島にとっての観光事業とは何であったのかを問うてみたい。『直島町史』には以下のようにまとめられている。

経済は、文化的な生活を営む支えとなるものであらねばならない。という三宅町長の信念であった。したがって、こうした見地から観光事業を見ると、直島が個々の利益追求のみを目的とした乱開発で、先進地によくある低俗な観光地になることは、民生上かえって大きいマイナスであり、直島の観光事業は何よりも町の主導による“清潔な観光”であることが期待された¹⁷。

三宅の目的とした「清潔な観光」は一応の成果をあげるものの、総合的な開発計画の必要性和大資本の企業を誘致する必要性を痛感させた。三宅とゆかりのあった東宝社長の清水雅の助言で、関東を中心に事業を展開していた藤田観光の小川社長の名が挙がった。しかし、小川による構想をもとに進められた直島開発も、国立公園特別地域に対する厳しい規制によるホテル建設の手続き面での行き詰まりが深刻な問題となった。加えて、高度経済成長の終焉による資金の枯渇により、1978年の小川栄一の死去をもって直島観光事業を中止し、1987年の会社解散によって観光会社による大規模な直島開発は未完のまま幕を閉じたのである。藤田観光の撤退に基づき、日本無人島株式会社の安藤正社長は、土地の処分について町に譲渡先の斡旋を依頼した。その結果、三宅の掲げた「清潔で健康な開発」に適合する企業として福武書店の名前が挙がることとなった。この後、福武書店の直島進出が始まる。1988年8月の町会議において、総一郎の説明した「直島開発計画」の目標は、「人と文化を育てるリゾート・エリアとして創生する」ものとされ、これを「直島文化村構想」と呼んだ¹⁸。

ここまで、直島の産業構造の変化すなわち農業・漁業から製錬業中心になり、そこへ観光事業を外部から招致していった経緯を概観した。総じて、直島における観光事業の導入は、まさに外部のまなごしを意識し、それらを自らに向けようとしている。つまり、観光事業化に伴って起こった突発的なものではなかったのである。直島にとって三菱製錬所の開業は、それ自体がまさに島の構造変化を起こす外から持ち込まれたものであったからである。また、観光事業が寸断されていた戦時においては朝鮮人の強制連行が行われ、三菱製錬所内での労働を課されたことが明らかとなっている。また、香川郡における在朝鮮人の統計は1917年以降に増加しており、三菱製錬所の位置した直島との関係が大きいと考えられている¹⁹。

直島における歴史のリズム、それは、近世以前の農業・漁業を中心とした生活に介入した三菱製錬所の開業という変調を経て、観光業の参入によって自然景観の価値が重なるようにして調和していったものではないだろうか。

3. アートサイト直島と福武コレクション

前節でみたようにベネッセは福武書店時代の1980年代後半に直島へ進出し、現代アートを押し出したリゾートとしてアートサイト直島を現在に至るまで展開している。ベネッセの所有する作品群はいわば、直島における「ベネッセらしさ」の核ともいえるものである。では、そのコレクションはいかに形成されてきたのであろうか。本節では、ベネッセのアートプロジェクトの原点である福武コレクションの歴史を概観する。

2013年にベネッセハウスミュージアムで開かれた「ベネッセアートサイト直島の原点——国吉康雄展」の報告書

によると、ベネッセホールディングスが福武書店の社名時代、同社が所蔵する美術作品群を「福武コレクション」としていたが、今では、「福武総一郎が所蔵する国吉康雄作品および資料」となっている²⁰。しかし、この展覧会が開かれるまで「国吉は、これまでベネッセアートサイト直島の活動と結びつけられることはほとんどなかった」²¹。国吉とアートサイト直島の関係について、新たに次のように説明されている。

福武書店（現：ベネッセホールディングス）の国吉康雄作品収集は、1970年代、福武総一郎の父である福武哲彦創業社長によって始められた。断続的に収集される国吉作品を見て、福武総一郎は、国吉作品がもつ、「考えさせる力」に強く引きつけられた。

（中略）福武の「現代アートは、自然の中でこそ現代社会の問題を考えさせる」という言葉を紹介したが、（中略）アートというものがこれほど強い力を持って問いかけてくるものなのだというのを感じさせたのは国吉康雄の作品だったのである。この、アートの力に対する信頼から、ベネッセハウスミュージアムの構想が生まれ、同館で、そして直島のそここで、現代アート作品が展示あるいは制作されてきた²²。

この展覧会では、国吉がアートサイト直島にとって重要であるにもかかわらず、哲彦時代のコレクションの確立の経緯やその特徴などについては詳しく説明されていなかった。これまで直島に関する研究は多くあるが、管見の限りコレクションに注目した研究はなされていない。そのため、「ベネッセアートサイト直島の原点」とされているコレクションの変遷をたどることは、本研究にとって必要である。本節では、コレクションの確立から1990年代中頃までの作品収集の傾向をたどることで、国吉の作品を中心としていた哲彦時代のコレクションがアートサイト直島とどのように結びついているのかを検討する。

福武書店の社史『福武書店30年史』によると、哲彦時代のコレクションが公に披露されたのは、「第5回オール福武祭」²³の初日にあたる1980年10月23日である。この「第5回オール福武祭」で展示された作品98点のうち50点が国吉の作品であり、それに次いで多かったのは陶器の37点であった。哲彦は美術作品の収集にあたり、大原美術館の藤田慎一郎館長にアドバイスを受け、方針をかためていった。この哲彦の方針とは、国吉康雄をメインに満谷国四郎を筆頭とする岡山出身の画家の作品を厳選主義に基づいて収集することであった。以上の方針により、収集されたコレクションは、1982年に天満屋岡山店での「郷土の生んだ国吉康雄とその時代の画家たち展」において公開された。展覧会の構成は国吉の作品130点のほか、岡山出身の洋画家やヨーロッパ印象派の画家たちの作品40点の計170点であった²⁴。次にコレクションが公開されたのは、1985年に哲彦が最後に関わった展覧会「国吉康雄と近代ヨーロッパの名画展」である²⁵。前回の展覧会にも関わった美術史家の乾由明が、この図録に寄せた文章によるとコレクションに含まれるヨーロッパの画家たちは、ルノワール、ゴーギャン、マチス、ピカソ、シャガールなど19世紀末から現代にかけてのヨーロッパの絵画の展開において、とくに業績を残した偉人たちであったことがわかる²⁶。

哲彦の死後、役職を受け継いだ総一郎は、コレクションの内容と今後の方向性について「今後の充実、鑑賞に耐えるものが手に入ればということで成り行き次第。国吉は本社で公開しているが、印象派は東京都多摩市に建設する新社屋に、現代美術は香川県・直島に整備中のリゾート施設に展示する計画だ」²⁷と発言している。総一郎は、1990年に国吉康雄美術館を岡山本社社屋に開館したが、印象派の美術館は同年内に構想を取りやめ²⁸、国吉康雄美術館も2003年に閉館した²⁹。

1994年に秋元のインタビューから、この頃のコレクションの収集傾向が現代アート寄りになったことがわかる。その理由は秋元によると「同時代に生きて同じ課題を担って作品化している現代美術を身近に感じることで、自分たちのやっているビジネスの課題とも共有できる部分が発見できるのではないか。現代美術にはクリエイティブな部分もありますから」³⁰であった。

哲彦時代に開かれた二つの展覧会にみられたように、国吉のようにコレクターの「同時代」の作品を収集するという点は、総一郎の方針にも受け継がれている。この芸術作品の同時代性を「ビジネスの課題」と結びつけることで、コレクションの収集傾向が現代アート寄りとなっていったのである。これらの原点といえるのが、哲彦時代に作品をコレクションする際のコンセプトであり、その中心にあった国吉だった。

国吉は、日本人である自分がアメリカ人として生きるために生涯を通してアメリカの社会と向き合ってきた。若くして渡米した国吉はアートスクールに通い、印象派の作品などに惹かれていた。アメリカ人としての自覚を持つようになった国吉は、戦争の時代をむかえるとプロパガンダを描くことになる。この時期には敵国の人間として扱われたこともあり、国吉は日本人の自分がアメリカ人になることとはどういうことか、アメリカ人として生きるということとはどういうことかを考えてきた³¹。その国吉の生涯を映した作品こそ、ベネッセのコレクションである印象派と現代アートを繋ぐ架け橋になったといえる。その例として「国吉康雄と近代ヨーロッパの名画展」の図録の表紙にも使用されている《バンダナをつけた女》を挙げよう（図3）。美術史家の山口泰二は、この作品について「国吉が自分の日常的な心情を重ねるのに適したものとして自然に浮かんできた等身大の姿である」³²と言及しているように、国吉とベネッセを結びつけているのは、日々をどう生きるかということであった。



図3 国吉康雄《バンダナをつけた女》1936、福武コレクション
『福武コレクションから——国吉康雄と近代ヨーロッパの名画展』図録、p.47より

直接的にはアートサイト直島とほぼ無関係であった国吉だが、いかに社会と向き合い、いかに生きるべきかという彼の課題は、「考えさせる力」として總一郎だけでなく、おそらく哲彦も引きつけており、その力が秋元の述べたように「ビジネスの課題とも共有できる」力として直島における「ベネッセらしさ」の形成に多大な影響を与えていたといえるのではないだろうか。

次節では、現代アートのなかでも美術館の建物から抜けだし、居住区内で展開される家プロジェクトに注目し、アートがつくれることで、その場所に起こった環境的变化と住民の反応を検討する。

4. 直島における家プロジェクト

本節では、アートサイト直島に含まれる家プロジェクトについて取り扱う。もともと直島に存在した建築物に外部からきたアーティストが作品をつくることによって、地域住民がどのような影響を受けたのかを描写し、「直島らしさ」の一端を明らかにすることを試みる。

家プロジェクトは、1997年に着工し、現在7点が公開されている。家プロジェクトにはいくつかの条件が定められている。「1. 本村という集落をエリアとする。2. その地域に長くあった既存の建物もしくは特定の場所を対象とする。3. 一人のアーティストが担当する。4. アーティストは建築家と協力して家を作品化する。5. 基本的にはプロセスを公開する。6. 完成した家は可能な限り永久設置する。7. プロジェクトを途切れないこと。8. エリアに点在させていくこと」³³の八つの条件である。そして、作品をつくっていく過程で、本村の歴史やその場所の意味を表出させていくというコンセプトで行われている。

アートサイト直島についての先行研究のなかで家プロジェクトに関するものは多い。西田正憲は、過疎地域に現

代アートを設置することにより、その土地の過去の来歴、生業、生活などの記憶を再生させるものになっていると述べている³⁴。彼の研究では、地域住民がアートを介して観光客と関わることによって、その土地の歴史や生活習慣を改めて認識するための機能を持ったものとして扱われている。

ここで、それぞれの作品の制作経緯と地域住民とのかかわりについて概観しよう。はじめにつくられたのは、1998年に完成した《角屋》である。《角屋》は、住人が高齢のため、退去することとなった築200年の民家をベネッセが買い取り製作された³⁵。道沿いの角に建っていることから名が付けられた《角屋》は、漆喰・焼板・本瓦によって外観が修復された。日本家屋の内部には、床面に巨大な水槽が広がり、住民が思い思いにスピードを設定したデジタルカウンターが沈められた、宮島達男の《Sea of time'98》が展示されている。

古民家の改築のほかに《南寺》の様に、明治時代には取り壊されて空き地であった場所に住民の間で受け継がれている南寺の記憶を具現化させるというコンセプトで新築されたものもある。つまり古民家と現代アートの組み合わせではなく、ある特定の場所に建築によってその場所を再構築するというアプローチをとることになった³⁶。これは、後の《碁会所》にも通じるコンセプトとなる。《南寺》の内部にはジェームズ・タレルの《Backside of the moon》が展示されている。この作品は、暗闇のなかに身を置き、やがてごくわずかな光が可視化されてくる過程を体験するという作品である。《南寺》について地元の子供たちは、新種の「お化け屋敷」ができたといって喜んだという³⁷。

2001年には《きんざ》が完成する。《きんざ》は、築200年の小さな家屋であり、内藤礼の《このことを》が展示されている。この作品のなかには、1度に1人しか入ることができない。建物下部の隙間から自然光が差し込むようになっており、柱や輪が置かれている。そして、明るさに慣れてくるうちにガラスや糸などで出来たオブジェがおかれていることが分かるという作品である。住民がこの作品を制作中の内藤と交流を持ったことにより、住民たちの間に作品への愛着がわいたというエピソードが、直島の広報誌に書かれている³⁸。

次につくられたのは2002年の《護王神社》である（図4）。護王神社は本村地区の氏神である。本殿の棟札から、江戸初期当時の領主高原氏によって整備され、明治初期の火災後に立て替えられたことがわかっている。その後100年以上大掛かりな改修が加えられず、老朽化が激しくなったために、住民の間に改修の話が持ち上がった。しかし、本村の住人のみで改修の費用をまかなうことは困難であったため、ベネッセに協力をお願いした。この時のベネッセは、家プロジェクトの一環として改修を行うことを条件とした。その後、住民との話し合いが設けられ、住民の合意を得て家プロジェクトの一環として再建されることとなった³⁹。設計は杉本博司が行い、本殿は壁面部分のみを以前のまま残し、板葺き屋根を新設し、拝殿は新築された⁴⁰。そのときの設計方針として、古代の神殿様式を想定し、地下に石室が作られ、本殿と石室がガラスの階段で結ばれているために、ほとんど原型をとどめていない。《護王神社》は、《南寺》とは異なり今でも信仰の場であることから、地域住民が護王神社とどのような関わりを持っているのかを調査した。



図4 本村地区の護王神社、2015年7月5日、枝木妙子撮影

もともと、護王神社は「ごぜんさん」の呼び名で親しまれ、本村の住人の信仰を集めていた。特に、参拝すると失せ物が見つかったり、社の前に置かれた狛犬の足に紐や鍵を結ぶと飼犬が遠くへ行かないなどと言い伝えられている。実際、現在も護王神社の狛犬には、紐や鍵が結び付けられている。現在も10月の第4土曜日と日曜日に祭りが行われており、従来の信仰の場としての機能が維持されているように見える。それだけでなく、2004年3月に埼玉県から移住し、本村地区にカフェをオープンした女性が、2011年の春に護王神社で結婚式を行った際には、近隣住民が神社の敷地内を掃除し、式の準備を手伝ったという⁴¹。このように、新しく移住した住民にも親しまれ、元からいた住民と新しい住民の交流の場としても機能し始めていることがうかがえる。

しかし、本村地区の商店の店主による「昔は毎日のようにお参りに行ったが、現在はあまり行くことがなく、やはり社の形が変わったことは、少し寂しさを覚える」⁴²という発言もあった。また、本殿の前には白石が敷き詰められ、その区画は神域とされ囲われている。そのため、昔からの風習であったお百度参りを行う場合に本殿の前まで参拝することが出来ないため、現在も住民と話し合いの場が続けられている。

護王神社は、現在も地域住民の信仰の対象であると同時に、現代アート作品でもあり、これを鑑賞するために観光客が訪れ、観光地としても機能している。この作品が目されるのは、杉本博史の作品に一貫している、時間の流れを凝縮し作品に壮大な時間の流れを表わそうとする作風⁴³が原因として挙げられている。このような古くからある信仰と現代アートが結びついた光景は、通常の氏神の社ではほとんど見られない直島特有の光景である。このように、住民の信仰そのものも現代アートの一部となるほど、住民とアートの距離が近いことが直島らしさの一側面であると考えられる。

おわりに

ここまで、「直島らしさ」と「ベネッセらしさ」の形成過程をみた。1節では、海外における直島の表象を観光ガイドなどから確認した。そこにはラグジュアリーなアートリゾートとしての直島像が構築されており、それはベネッセの海外向け広報戦略を反映していると考えられる。注目すべきはそこに直島の自然は打ち出されていても、住民の存在感はないことである。2節では、直島の住民の存在を産業の歴史のなかに求めた。漁業や農業を介して瀬戸内の豊かな自然とともに暮らしてきた直島の人々は、近代以降、製錬業や観光業という新たな産業を受け入れてきた。今日の直島における、自然に対する認識とベネッセのような企業誘致は、突発的なものではなく、産業や生活の変化の中で外部の眼差しを受け入れてきた直島の人々の歴史の上に積み重なったものなのである。3節では、「ベネッセアートサイト直島の原点」とされている福武コレクションの作品傾向の変遷をたどることで、ベネッセアートサイト直島の以前から育まれてきた「ベネッセらしさ」を明らかにした。哲彦が、国吉作品から受けたアートの持つ現実への影響力や、「日々をどう生きるか」といった視点が、現在のアートサイト直島の中心コレクションである現代アートに引き継がれている。

最後に、4節においては、聞き取り調査から得た情報を中心に、もともとある建築物や場所を利用した外部のアーティストによる作品制作の経緯と地域住民との関わり方を記した。歴史や場所の意味の表出方法を概観するとともに、神社が現代アート作品となった今でも古くからの信仰が残っていることや、そこに直島独自の新たな光景が生まれていることを確認した。アートを触媒とした直島における生活空間と観光地との共存が新たな「直島らしさ」として立ち現れている。

アートサイト直島は、島という地理的に断絶した環境に、地域や時代を顕在化させる性質を持つ現代アートを設置することで「直島らしさ」が可視化されたものである。それは、現代アートを通してみえてくる瀬戸内海の豊かな自然や、地域の歴史であり、ベネッセや観光客という外部からの眼差しが直島に見出した「直島らしさ」である。しかしそれだけでなく、直島における「直島らしさ」は、現代アートを地域に受け入れることで新たに生まれた光景や、地域住民の変化についても指摘できる。もちろんベネッセと住民の間には緊張がないわけではない。ある作品がつけられた当初には住民の間に不満があったが、10年という時間の経過とともに表面には出なくなっていることが今回の調査でも確認できた。その一方、家プロジェクトの制作に関わって以来、2002年には「まちづくり景観条例」⁴⁴の制定、2003年には自治体による直島観光協会⁴⁵が設置されるというように、現在では住民側も直島のアー

トツーリズムに参加している。ベネッセの企業理念である「よく生きる」というコンセプトは、直島においてアートと携わる地域住民の活動にもみることができるだろう。

以上、本稿では節ごとに「ベネッセらしさ」と「直島らしさ」を交互にとりあげ、それらが互いに影響しあいながら多様な地域表象を形成し、共存していることを明らかにした。それによって生まれる新しい交流の場や光景こそが観光客を惹きつける直島の魅力なのではないだろうか。

注

- 1 秋元雄史（当時直島コンテンポラリーアートミュージアムのチーフキュレーター）、1998、「直島・家プロジェクト」『直島通信』1（創刊号）：ページ記載なし。
- 2 福武総一郎・北川フラム、2011、「瀬戸内国際芸術祭、そしてベネッセアートサイト直島の今後」『NAOSHIMA NOTE』2011（5月号）：ページ記載なし。
- 3 宮本結佳、2012、「住民の認識転換を通じた地域表象の創出過程：香川県直島におけるアートプロジェクトを事例にして」『社会学評論』63（3）：391-407、（2015年8月25日参照、<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019559022>）。
- 4 国土交通省観光庁、2012、「NPO 法人 直島町観光協会」『地域いきいき観光まちづくり 2011』：116-119（2015年8月29日参照、<http://www.mlit.go.jp/common/000213061.pdf>）。
- 5 豊田一男・田中明夫・坂口博子、2011、「島と人と、芸術祭 犬島・豊島・直島編」『NAOSHIMA NOTE』2011（5月号）：ページ記載なし。
- 6 "Seven Wonders", 2000, *Condé Nast Traveler*, 35（3）, Condé Nast Publications, 134-149.
- 7 Goss, Rob, 2013, *TUTTLE Travel Pack JAPAN*, TUTTLE Publishing, 103-104.
Adams, Susan, 2015, "Treasure Islands: Inside A Japanese Billionaire's Art Archipelago" *Forbes*, Forbes Media LLC. (Retrieved December 9, 2015, <http://www.forbes.com/sites/susanadams/2015/07/29/naoshima-island-inside-japanese-billionaire-soichiro-fukutakes-art-archipelago/>).
- 8 1941年生まれ。直島ではベネッセハウスミュージアム（1992年）、家プロジェクト《南寺》（1999年）、地中美術館（2004年）、李禹煥美術館（2010年）、ANDOMUSEUM（2013年）などを設計している。
- 9 Ingrid, Williams K., 2011, "Japanese Island as Unlikely Arts Installation" *The New York Times* 20110828. (Retrieved August 29, 2015, http://www.nytimes.com/2011/08/28/travel/naoshima-japan-an-unlikely-island-as-art-attraction.html?_r=0).
- 10 秋元雄史、1999、「ベネッセ賞とは何か」『直島通信』2（2）：ページ記載なし
ベネッセはこの基準についてこれ以上の具体的な説明をしていないが、現代アートの最新の動向を担っている作家であると同時に、直島でのコッミュンワークに適したアーティストを選択しているようだ。
- 11 作家を現地に招いて、作品を制作してもらう手法。
- 12 例えば以下の記事には都会と直島を比較するような表現がみられる。
Iyer, Pico, 2011, "Museum peace: Japan's Naoshima island" *The guardian*, Guardian News and Media Limited or its affiliated companies. (Retrieved August 29, 2015, <http://www.theguardian.com/travel/2011/jul/10/japan-travel-art-island-naoshima>).
- 13 同上
Morgan, Kate, 2010, "4 reasons to visit Naoshima, Japan's island of art" *The Lonely Planet*, The Lonely Planet. (Retrieved August 29, 2015, <http://www.lonelyplanet.com/japan/travel-tips-and-articles/76361>).
- 14 ベネッセアートサイト直島、2015、「ベネッセアートサイト直島について メッセージ」, ベネッセアートサイト直島ホームページ（2015年8月4日参照、<http://www.benesse-artsite.jp/about/message.html>）。
- 15 宮本：391-407.
- 16 直島町史編纂委員会、1990、『直島町史』直島町役場：518-644.
- 17 同書：733.
- 18 同書：740-745.
- 19 浄土卓也、1992、『朝鮮人の強制連行と徴用 香川県・三菱直島製錬所と軍事施設』社会評論社：163-165.
- 20 江原久美子編、2013、『ベネッセアートサイト直島の原点——国吉康雄展』報告書、公益財団法人福武財団：7.
- 21 脇清美・横溝舞・川浦美乃・江原久美子・中尾貴子・古部隆子・小谷明編、2012、「国吉康雄とベネッセアートサイト直島」『NAOSHIMA NOTE』2012（11月号）, 7: 3.
- 22 江原編：12.
- 23 1975年の第1回目にあたる「オール福武祭」から続けられてきた会社の行事である。「第5回オール福武祭」では、懇親会や体育祭な

どが行われている。

株式会社ベネッセコーポレーション 加賀山弘編, 2005, 『ベネッセコーポレーション 1955-2005』: 43.

- 24 『福武書店 30 年史』 編集室, 1987, 『福武書店 30 年史』 株式会社福武書店: 252-254.
- 25 同書: 319.
- 26 朝日新聞大阪本社企画部, 1985, 『福武コレクションから——国吉康雄と近代ヨーロッパの名画展』 図録, 朝日新聞社: 12.
- 27 「企業ことしの課題 (1) 福武書店社長福武総一郎氏——メセナ、新本社内に美術館」『日本経済新聞』1991.1.9, 地方経済面, 中国 B: 35.
- 28 「対外面より社風改善のバネに、企業美術館『社員のため』(土曜版)」『日本経済新聞』1991.5.11 朝刊: 41.
- 29 脇清美・横溝舞・川浦美乃・江原久美子・中尾貴子・占部隆子・小谷明編: 3.
- 30 山本育夫事務室 DOME 編集室・日本文京出版株式会社商品企画部編, 1994, 「直島ベネッセハウス探訪——瀬戸内海に浮かぶ、リゾート・ミュージアムの波打ち際」『ミュージアム・マガジン・ドーム』日本文京出版株式会社, 15: 15.
- 31 山口泰二, 2004, 『アメリカ美術と国吉康雄——開拓者の軌跡』日本放送出版協会: 4-7.
- 32 同書: 117.
- 33 直島通信, 2001, 「『直島・家プロジェクト』におけるコミッションワークの意味」『直島通信』3 (3): ページ記載なし.
- 34 西田正憲, 2008, 「過疎地域の越後妻有と瀬戸内直島における現代アートの特質に関する風景論的考察」『ランドスケープ研究』71 (5): 785-790.
- 35 秋元雄史, 1998, 「島にアートは根づくのか?」『直島通信』1 (創刊号): ページ記載なし.
- 36 秋元雄史, 2001, 「1999 年 3 月完成『南寺』——地域の歴史の掘り起こし——」『直島通信』3 (3): ページ記載なし.
- 37 中沢新一, 2003, 「島からの挑戦」『美術手帳』55 (831): 18-22.
- 38 直島通信, 2003, 「『直島・家プロジェクト』その後。」『直島通信』2003 (6 月号): ページ記載なし.
- 39 2015 年 7 月 5 日、直島にて、家プロジェクトガイド・S 氏とのインタビューより。
- 40 木村優, 2003, 「神道建築の現代性」『新建築』78 (2): 174.
- 41 直島通信, 2012, 「護王神社に守られ暮らすこと——直島の旅人から住人へ」『NAOSHIMA NOTE』2012 (8 月号): 9.
- 42 2015 年 7 月 5 日、直島にて、U 氏へのインタビューより。
- 43 東京国立近代美術館編, 2014, 『現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展——ヤゲオ財団コレクションより』図録, 東京国立近代美術館.
- 44 直島町, 2002, 「直島町まちづくり景観条例」, (2015 年 8 月 28 日参照, http://www.town.naoshima.lg.jp/reiki_int/reiki_honbun/0124RG00000299.html).
- 45 国土交通省観光庁: 116.

Forming “the Local Identity of Naoshima” in Benesse Art Site Naoshima

TAKAMISAWA Nagomi, FURUTA Ken, EDAKI Taéko,
NAGAI Sayako, ATOYAMA Goki

Abstract:

This paper studies the Benesse Art Site Naoshima, an art-related activities in inland sea of Japan by an educational company Benesse, as a remarkable case of effective regional revitalization through corporate art project, from the angles of the corporate aim and locality of the community. Benesse repeatedly promoted the identity of Naoshima Island and local culture as the subject of their art project. This paper aims to clarify the developing process of “the local identity of Naoshima” to consider the present situation, by studying the progress in following four field: 1) appeal in Benesse's overseas publicity campaign, 2) histories of Naoshima's industries, 3) Benesse's previous art projects, and 4) the relationship between art works and the residents in local communities. The result finds that the residents in Naoshima had flexibly responded to a new relationship from outside, and they in their original way accepted “the corporate identity of Benesse”, which regard art as a catalyst for better life (bene=well, esse=to live) . In this way, the residents formed the multilayered “the local identity of Naoshima” though in small scale, and perform their identity toward outside people.

Keywords: Community Revitalization, Art tourism, Setouchi Triennale, Mecenat, Tetsuhiko FUKUTAKE

ベネッセアートサイト直島における「直島らしさ」の形成をめぐって

高見澤 なごみ・古田 賢・枝木 妙子・
永井 彩子・後山 剛毅

要旨：

本稿はベネッセアートサイト直島のプロジェクトを地域活性化の顕著な事例として注目する。ベネッセは当初より繰り返し、島のアイデンティティや固有の文化の問題をプロジェクトの課題として表明している。本稿は、アートプロジェクトが掲げた固有性概念「直島らしさ」形成の経緯を跡付け、現状を考察することを目的とする。そのために文献調査と現地調査を行い、1. 現在の海外向け広報活動におけるベネッセの姿勢、2. 直島の産業の歴史、3. ベネッセのアート事業の歴史、4. 居住地区におけるアートと住民の関係、の側面から検討した。その結果、これまでも外部との新しい関係に柔軟に対応してきた直島の住民が、アートを「よく生きる」ための触媒と考える「ベネッセらしさ」を独自の方法で受け入れることで、小規模であっても重層的に「直島らしさ」を形成し、それを外部に向けて発信していることを確認した。

